

ヨーロッパ・チュチェ思想研究会会長
マッテオ・カルボネリ

親愛なる同志、友人の皆さま

本日ここヘルシンキにおいて、ヨーロッパ・チュチェ思想セミナーを開会できますことを、大きな喜びといたします。本セミナーは、チュチェ思想の重要な諸テーマをさらに深め、それを通じて我が大陸の現実を照らし出す機会であると同時に、本年、ヨーロッパ・チュチェ思想研究会創立 40 周年を記念する場ともなっています。

参加された皆さま、そしてオンラインで参加の皆さま、ようこそお越しくできました。心より感謝申し上げます。

特に、わざわざご臨席くださった朝鮮代表団の皆さま、また丁重なメッセージを寄せてくださった朝鮮社会学者協会に、深甚なる謝意を表します。

そして、健康上の理由により出席が叶わなかったものの、貴重な寄稿とともにご挨拶をお寄せくださったチュチェ思想国際研究所事務局長・尾上健一先生に、特別の感謝を申し上げます。

ここに集う皆さまを代表し、尾上先生の一日も早いご快復を心よりお祈り申し上げます。

本セミナーは、本来であれば1985年10月20日に創立されたヨーロッパ・チュチェ思想研究会 40 周年を記念して、もう少し早い時期に開催される予定でした。

しかしご承知のとおり、数週間前に平壤にて国際セミナーが盛大に行われ、世界各国から多数の代表が参加しました。

光栄にも、私もその代表団の一員として加わることができ、また朝鮮労働党創立 80 周年を祝う行事において、朝鮮人民と喜びを分かち合う機会を得ました。

朝鮮人民が朝鮮労働党の指導のもと、長きにわたり成し遂げてきた成果は、チュチェ思想を適用することによって実現されました。この独創的な理論は、民族の自主と社会主義への道を理解し鼓舞する力を与え、世界各地において関心を引き起こしました。ヨーロッパにおいても、各国の研究会が次第に数を増してきたのはその証左です。

こうした理由から、ヨーロッパにおいても他地域と同様に、地域的な水準でチュチェ思想の研究と普及を推進するための組織を設立する必要が高まってきました。

1984年リスボン、1985年4月ウィーンでの会合を経て、各国研究会の活動を強化、調整するための地域機関設立の必要性が確認され、同年10月20日、パリにおいてヨーロッパ・チュチェ思想研究学会が創立されました。

フランス、イタリア、イギリス、ドイツ、オーストリア、スイス、デンマーク、フィンランド、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、ポルトガル、ギリシャ、マルタなど、ヨーロッパ各国から多くの代表、学者、ジャーナリストが参加しました。

初代理事会においては、パリ第一大学教授エドモン・ジューブ氏が会長に選出され、在ジュネーブ国際平和ビューロー副委員長でありギリシア自主平和運動副委員長のミカエル・ペリステラキス、オーストリア共和国憲法制定委員会委員でありインスブルック大学法学・政治学部長のノベルト・ウィーマー氏が副会長に選出されました。また、デンマーク・ロスキルデ大学教授ブルーノ・アモロソ氏、そして当時キエチ大学国際法教授であった私自身を含む諸氏が理事に選出されました。

その後、ヨーロッパ・チュチェ思想研究学会は数多くのセミナーや理事会を開催してきましたが、特に注目すべきものとして、1999年6月にモスクワで開催されたセミナー(18のヨーロッパ諸国に加え、日本、インド、朝鮮民主主義人民共和国の代表団が参加)、2007年5月にローマ大学「サピエンツァ」キャンパスの大講堂で開催されたセミナー(この場でキース・ベネット氏が新たに副会長に、私が新たに書記長に選出)、2017年10月にローマで開催された「現代世界における自主と平和」をテーマとするヨーロッパ・チュチェ思想セミナー、そして2019年9月にソフィアで開催された「自主・主権と国際関係」をテーマとするセミナーが挙げられます。

さらに、新型コロナウイルス感染症の流行下においても制約を克服し、オンラインによるヨーロッパ・セミナーが開催されました。2021年12月にはイタリアをホスト国として金正日総書記逝去10周年に際し「金正日総書記の業績」をテーマに、2022年2月には金正日総書記生誕80周年に際して「金正日総書記のチュチェ思想の発展と適用への貢献」をテーマにおこなわれました。直近では2024年9月、ソフィアにおいて「主権と自主、新しい国際関係」をテーマにセミナーが開催され、その際、理事会ではエドモン・ジューブ教授を名誉会長に、私を会長に、ユハ・キエクシ氏を新書記長に、そしてロシア社会科学アカデミー東洋学研究所部長のアレクサンドル・ヴォロンツォフ氏を理事に任命しました。

また、すでに次回ヨーロッパ・セミナーの開催も検討されており、来年には別の都市で開催される可能性があります。これは、ヨーロッパ地域におけるチュチェ思想研究の広がりを示すものとなるでしょう。

チュチュ思想研究者たちの積極的な献身により、ヨーロッパ・チュチュ思想研究学会はヨーロッパ・セミナーや講演会などの開催にとどまらず、さまざまな分野で活発に活動してきました。近年、各国で関心が高まるなか、こうした行事はますます頻繁におこなわれています。各国・地域の研究会を調整し、異なる国々の研究者同士の関係を発展させることにより、セミナーの記録集の編纂・刊行や、チュチュ思想を発展させた主要文献の収集・翻訳といった一連の取り組みもおこなってきました。これは単にチュチュ思想の研究と普及を促進するためだけでなく、ヨーロッパの現実をチュチュの原理に照らして分析するための道具や鍵を提供し、同時に追求すべき目標を達成するための基準を示すことを目的としています。

朝鮮人民が国内における社会発展を成し遂げ、また国際舞台において対等な地位を獲得してきた成果を顧みると、その目標と方法がチュチュ思想の原理に明確に示されていることが理解できます。チュチュ思想を正しく適用したことにより、朝鮮人民はこれらの成果を収め、朝鮮労働党は 80 年という歴史上最長の期間にわたり人民を導いてきました。

他方、東欧の社会主義国家は崩壊し、多くの国々が他国の政策に左右され深刻な危機に直面している現状とは対照的です。

その主な理由は、第一に「自主」の原理、そしてそれと結びついた「人民大衆第一」の原理にあります。朝鮮の指導部はチュチュ思想を適用するにあたり、常にこれらの原理を堅持してきました。

実際、チュチュ思想においては「自主」が根本原理としてあらゆる水準で確認されており、それは同心円のように、個人の自主から始まり、人民の自主、さらに国家の自主へと広がっていきます。

注目すべきは、自由主義的諸学説が個人の優越を保障すると唱えながら、実際には強者のみを肯定し他を否定するように、また強国・強民族の優位を他者の犠牲の上に主張するのは異なり、チュチュ思想における人間の自主は、その人間が属する共同体の中でのみ実現され得るという点です。

そして、その共同体は人民として他の共同体から独立していなければならない、人民が歴史の主人公として自主を実現するためには、国家が他の国家と対等な立場で自主を確保していなければならないのです。

したがって、国家の自主は、人民の自決を通じて社会的・市民的発展を実現し、その枠組みのなかで真の個人の自由を実現する保証となります。それは「弱肉強食」の法則によるものではなく、すべての人々に利益をもたらす、共通の目的を確保する連帯と協力の仕組みによって実現されるのです。

この時点で明らかのように、第一の目標は国家の主権と自主を守ることであり、同時に人民大衆の福祉と生活条件の改善を追求することです。すべての政

府活動はこの方向に向けられ、人民大衆が自らの国家に共感し支持できるようにしなければなりません。

このように、朝鮮民主主義人民共和国において人民の要求を最優先に掲げる「人民第一主義」の政策は、人民を党と指導者の周りに固く団結させるとともに、国家の自主を守ることによって国内における社会的正義を高め、国際舞台においても他国が平和維持のために協力せざるを得ない国家としての地位を確立することを可能にしました。

したがって、チュチェ思想は「自主」という根本原理を中心に据え、現代において特に重要な意義を持っています。自主の概念は、達成すべき目標であると同時に、あらゆる覇権や従属を覆す新しい国際秩序の基準として不可欠の意味を獲得しているのです。

今日、世界のますます多くの人民が、搾取や従属の条件にもかかわらず、真の自主を実現することを希求しています。

これはヨーロッパにおいても同様であり、各国政府は人民の福祉から資源を奪い、それを再軍備や他国との戦いに振り向け、「民主的価値」と称する名目のもとに支配を拡大しようとしています。ところが実際には、彼ら自身がその「価値」を否定し、人民の意思や利益に反してまで資本主義を輸出することを真の目的としているのです。

とりわけ今日、ロシアとの関係において顕著です。ヨーロッパ諸国の政府は長年の経済的・文化的な結びつきを断ち切り、自国の利益に反してまで、米国が決定した代理戦争を望まぬ人民を無視して絶え間なく激化させています。その結果、ヨーロッパ大陸全体、さらには他地域にまで破滅的な危険を及ぼしかねない新たな世界大戦を引き起こす瀬戸際に立たされているのです。

同じように耐え難く痛ましい侵略は、中東においても誰の目にも明らかです。パレスチナ人民は長きにわたり、イスラエルによる苛烈な植民地主義政策の犠牲となってきました。彼らを領土から追放し、あるいは絶滅させようとする恣意的かつ暴力的な手段は、かつて米国において先住民が被った運命を想起させます。しかも今日では、歴史上かつてないほどの野蛮な水準に達したジェノサイド的行為が行われており、西側諸国はなおもイスラエルを「中東唯一の民主主義国家」と見なして共犯関係を続けています。

結局のところ、これは、帝国主義が常に、支配に屈せず、自らの社会制度を変えるような強制に従わず、独自の道を歩もうとする世界のすべての人民に対して仕掛ける侵略と同じものです。その例としては、ここではキューバやベネズエラを挙げるだけで十分でしょう。

以上を踏まえると、このような状況を終わらせ、真に新しい国際秩序を打ち立てる道は、チュチェ思想の原理にこそ見いだすことができます。それは、人民

が搾取や覇権を排して互いに協力し、自主と社会的発展を達成し、世界の平和を築くための指針を与えるものです。

本日創立 40 周年を祝うヨーロッパ・チュチェ思想研究学会は、これまでと同様に、チュチェ思想の研究と普及を推進し、研究者同士の関係を強化し続けます。その際、チュチェ思想国際研究所との緊密な協力、学者や他の地域協会、とりわけ朝鮮社会科学者協会との完全な合意のもとに活動を展開していきます。

本セミナーにおける今後の発表が、さらなる洞察をもたらす実り多いものとなることを確信しています。